

活動報告書

報告者氏名: 中村武志

所属: 小野市立小野特別支援学校

記録日: H26年2月12日

【対象児(群)の情報】

・学年

中学部1年生、女子

・障害名

広汎性発達障害

・障害と困難の内容

知的な遅れを伴う自閉症傾向の女子生徒。

有意語の発語は数語程度だが理解言語は多く、日常会話レベルの言葉は理解できる。

書字は限られた文字のみだが、文字を見聞きして50音キーでタブレットPCへの入力が可能。

学齢期前にPECSのトレーニングを受けた経験があり、絵カードと身振りによるコミュニケーションが部分的に可能。

味覚が独特で、食べられない物が多くあったが次第に緩和の傾向。現在は食欲旺盛で一年前から肥満傾向。

食事、行動、コミュニケーションへの意欲は高いが、一部支援が必要である。

思い通りにならないことがあると、自傷行為のほか、物を壊したり人を傷つけたりすることがある。

【活動目的】

・当初のねらい

- VOCAアプリを用いて自発的なコミュニケーションを促し、自分の意志や要求を確実に伝えられること。
- 精神的に安定した状況下で意欲的な態度で生活を送り、学習にも着実に取り組めるようになること。

前年度からの引き継ぎで、VOCAアプリとして「ねえ、きいて。」や「ドロップトーク」を重点的に使用する予定であったが、タイムケアや家庭など学校外の生活場面で、すでにそれらのアプリを上手く使えていることが判明した。4月の段階で、のどが渴いた際には「ジュース飲みたい」、汗をかいてサッパリしたい際には「お風呂入りたい」などと発音するアイコンを選択できていた。そこで本年度は、既述のアイコンを選択する形式のアプリだけでなく、文字を入力しそれをiPadが発音するアプリ（「かなトーク mini2」「ボイスエイド」など）を中心に利用することとした。文字の入力には、正確さが要求されるので、確実に文字を入力する、また場に応じた内容を打ち込むといった内容を現在実践している。

・実施期間

2013年4月～2014年3月

・実施者

中村武志、大崎敬太、西村美樹

・実施者と対象児の関係

魔法のランププロジェクト対象生徒と指導担当及び学級担任

【活動内容と対象児(群)の変化】

・対象児(群)の事前の状況

小学部入学前に兵庫教育大学の発達相談で PECS を体験し、事柄とシンボルとのマッチングができ始めていた。発語はなく、自分の気持ちが伝わらないとイライラして過ごす。イライラが募ると自傷行為や他人を傷つける行為が現れ、家族や担当教師は手や顔などに生傷が絶えなかった。学習に対する意欲は低く、課題を二度行うことを頑なに拒み、離席や逸脱が数十秒ごとに見られた。4年生ぐらいから15分程度なら着席して学習を行えるようになったが、課題への取り組みが継続するのは数分間だった。コミュニケーションには絵カードを一部利用していたが、本人の希望や心境を表現できるような内容でなかったため、使用範囲は限られた。コミュニケーションの主な方策は表情や態度とクレーン、腕引きなどであった。発語はないが、無意味な音は発する。小3、4年時で、背面からの3語以上の指示にもかなりの頻度で応じることができたので、内言語としては日常会話程度の語彙と理解力を有すといえる。

入学時は食べられる食材やメニューがかなり限定される状況にあり、体調を崩すことも多かった。保護者は、体調不良時に原因の特定が周囲の者に正しくできないことが一番の心配であると言っていた。

6年生時に「魔法のじゅうたん」プロジェクトの対象となり、いろいろなアプリや自作教材を支援ツールとして用いることができた。iPadはまさに自分と周囲の者をつなぐコミュニケーション手段の主なものとなり、伝わる喜びを実感し始めることができた。夏以降、発語も急速に増え、ジェスチャによるコミュニケーションの表現力も高まり始めた。構音練習にも応じるようになり、30分程度の学習時間は離席せずに継続した学習が可能となった。

家庭では、夏休み中に母親が付き添って文字入力の実践を行って来て、以降は、指示した文の入力が1人でできるようになった。

同時に、自傷行為や他者を傷つける行為も急に減少していき、食欲も旺盛になり、体格も著しく向上した。穏やかな表情で一日生活できる日が増えている。

・活動の具体的内容

1.家庭での取り組み

①おやつの時間

学校で実践中の食事の際の取り組みを家庭でも行っている。食べることへの興味が高い状況に着目し「かなトーク mini2」でほしいおやつの名前を打ち込み、それをもらう（または買ってもらう）取り組みを日常的に行っている。このアプリは昨年度途中から本生がタイピングして使う主な VOCA アプリで、専用の50音キーボードが50音表と同じ並びであり、抵抗なく使用できるようになった。代替発声もスムーズで、本生も気に入っている様子である。母親と協力し、VOCAにおやつの名前を入力しない限りそれを手に入れることができないように取り組んでもらった。当初は戸惑っていたようであるが毎日行った結果、現在ではごく自然に要求が行えている。

②「ねえ、きいて。」の利用

自分の思いを保護者に正確に伝えるというねらいで、学校と同じく「ねえ、きいて。」を使用している。使用頻度が昨年度よりも飛躍的に増えており、本生にとって iPad が自分の意志を伝えてくれる重要なツールであるという意識を強く感じさせる支援ツール（アプリ）である。シンボルを組み合わせて並べて発声させると文のように聞こえるので、周囲の者にも内容が伝わりやすい。

③マッチング練習（図1）

より円滑な文字の入力が、今後一層支援ツールとして活用を進める上での一つのキーワードになると考え、家庭でも継続して長期休み等を利用し、文字の入力練習を行っている。既述の通り、本生は食べる行

為に興味を持っており、新聞広告に記載されてある食べ物を切り抜き、食べ物カードを作成した。切り抜いた写真の下には名前を書き込んでいる。写真と名前のマッチングを行うことが目的であるが、同時に、食べ物名前を覚えるという目的もある。文字を見て入力することから、将来写真を見て文字を入力することへのステップアップの準備段階として本教材を提供している。



(図1、家庭で作ったカード)

2 学校での取り組み (中間報告で書いていない内容)

① ジャンケン

年度当初から、学級の仲間あそびや授業導入部のショートゲームで行うジャンケンの際に必ず利用している。「ドロップトーク」に「ぐ」「ちょき」「ぱー」のアイコンを作成し、選択させるようにしている。本生はジャンケンのルールを完全に理解しているわけではないが、これによりクラスメイトと同じ『場』を共有でき、周囲とのコミュニケーションの向上を図ることができると思う。

② 体調の報告

本生にとって体調不良を訴えることは、以前からの課題であった。体調不良の際に本人はどのように良いのか分からず、支援者に爪を立てる、引っ掻く、噛みつくなど、他者を傷つける行為を日常的に行っていた。本年度も、当初は身体の調子が良くない際には、このような行為を行おうとすることが何度かあったが、その際には必ず「ねえ、きいて。」のシンボルを選択し、気持ちを表現させることを促す指導を行った。その結果、学校だけでなく既述のように家庭でも iPad を用いて早期に自分の体調不良を伝達できるようになった。

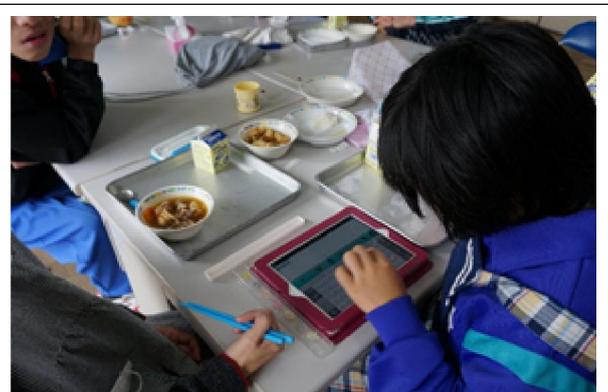
・対象児(群)の事後の変化

他者を傷つける行為が一昨年度と比べて激減している点が最大の変化である。昨年度までは、毎日のように他者を傷つける行為があったが、本年度は数回に留まっている。ここで注目したいのが「本年度はどのような状況で他者を傷つける行為が出たのか」という点である。他者を傷つける行為を行う背景には、自分にとって嫌なことがある時、また体調不良のようにどうして良いのか分からない時に起こるという共通した条件を見い出すことができた。

本年度の課題としては、文字の入力から、またはシンボルを選択し要求を伝えることにも力を入れていたが、この「他者を傷つける行為を減らす」という点にも重点を置いていた。

もう 1 点大きな変化は、本生の声が出るようになった点である。要求を伝えるという点に関しては iPad を通して伝えることと同等以上の効果をもたらしたと考えられる。iPad をコミュニケーションツールとして用いる際には必ず発声させることを、支援者は心がけていた。その結果、自然と声が出るようになったのである。

一方で、本人がどう表現していいかわからない身体の不調や未知の出来事に対しては、どのアイコンを選択すべきかわからない様子で、まれに他者を傷つける行為に出ることもある。そういった場合に iPad の「ねえ、きい



(中間報告でレポートした食事の取り組み
…周りの友人の視線も温かい(ˆoˆ))

て。」を用いて気持ちの表現を促すと、選択するアイコンは「ちょちょやって」である場合がほとんどである。このことから、体内の各部位の違和感と、その身体状況を的確に表現するためのアイコン選択の一致までには至っていないと推察できる。本生は言葉の理解がある程度できているので、体の名称についても言葉でインプットさせることは可能である。一方で、体内にあって顕在でない器官の違和感を的確に判断し、自ら周囲に伝えるアウトプットの側面では、その異常個所を伝えることがまだまだ難しいことが考えられる。体調不良を的確に伝えることがストレス軽減に直接つながることを考えると、身体内外の部位の名称と自身でのマッチング、知覚と指示部位の運動とのマッチングなど、身体に関わる学習も日常的に行う必要があると感じている。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

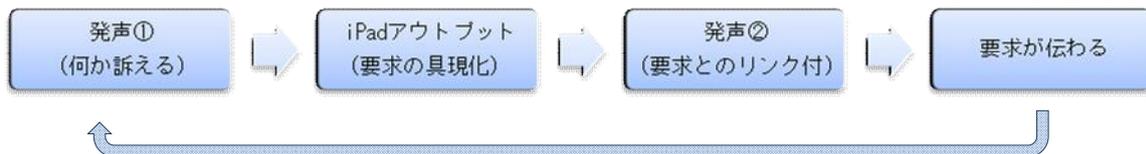
体調や気持ちの不安を伝えることができないために他者を傷つける行為を繰り返す、換言すれば、それを伝えることができれば他者を傷つける行為が減るのではないかと仮定した。

他者を傷つける行為に出そうになった際には、必ず iPad を用いて気持ちの表現を行うように指導した。攻撃することで気持ちを伝えるのではなく、iPad という支援ツールを通じて的確に伝えることの大切さを、一年間を通して徹底的にシミュレートしてきた。

結果的に他者を傷つける行為が減ったのは、本生がこの取り組みの意味を理解してくれたからだと感じている。指導した実感としては「パニックを起こして他者を傷つける行為を行っていたのではない」ということである。従来は、自分の要求を伝える手段が無かったが、周囲にはそれを理解してほしい、…どうして良いのか分からない、といったジレンマに陥っていたと考えられる。本生徒にとっては気持ちや要求を伝える方法を手に入れた今、他者を傷つける行為を行う必要性自体減少したといえる。

また、発語や意図的な音声の表出ができることで、支援者に対して単語で話しかけたり「バババッ」などと発声して訴えたりすることが日常的にみられるようになった。

何かを訴えるような場面での発語や発声を行ったことを確認した支援者は、即座に iPad を渡し、本人に確認を行う。本人は VOCA で詳細な表出を行う。サイクルとしては下記のような流れになる。



・エビデンス(具体的数値など)

【他者を傷つける行為の出現状況】

小4生時 爪立てや引っ掻き …10～50回/日 (日常的に) 対象…担任・旧担任を中心に
 噛みつき …0～8回/日 不安なことがあると担任に
 机で自分の歯を殴打 …0～2回/日 要求が通じず、特に不満が高まったとき
 固いもので歯をたたく…日常的 少し不安なことが不満なことがあるとき
 (歯をたたくのを要求する場合も多かった)

(小4時の担任の指導記録から)

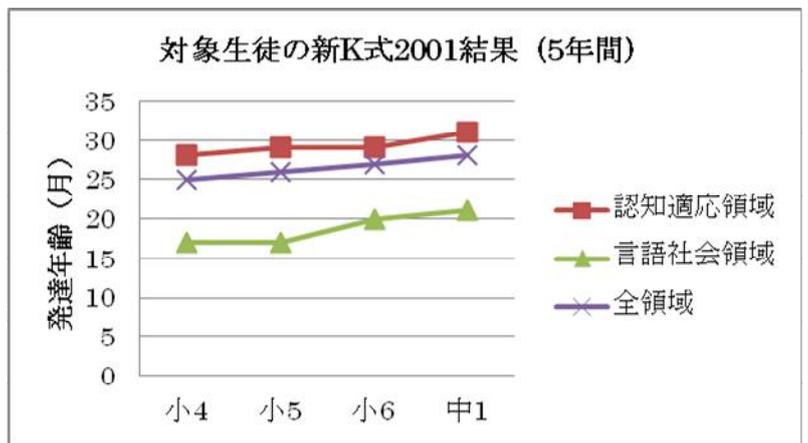
中1生時 爪立てや引っ掻き …5回/年 対象…担任チームに
 噛みつき …0回/年
 机で自分の歯を殴打 …0回/年
 固いもので歯をたたく…ほとんど見られなくなった

(本年度の記録から)

【新K式 2001 発達検査の経年変化】

本校では毎年児童生徒に何種類かの発達検査を実施しアセスメントの一つとして活用している。新K式 2001 については、毎年11～1月に全員実施している。対象生徒は魔法のじゅうたん PRG から継続しての取り組みだが、担当者の配慮で小5の2月からiPadを支援機器として使用し始めている。これは小5生の検査日から約9週間ということになる。小5から小6の一年間には、

これまでには見られなかった有意語の発語が始まった。検査結果からも言語社会領域が急に伸びており、言葉で伝えようという態度が旺盛になったことと関連している。また、小6から中1にかけては認知適応領域で急な伸びが認められる。これは、非社会的な行動を本人の力で抑制し、周囲の人たちと協調的に生活ができるようになった取り組みの記録とも整合する。これらの顕著な発達の伸びが認められたことで、全領域においても緩やかではあるが確実な発達が顕われている。小学部低学年の頃、検査自体が成立しにくいほどの荒れた状況だったことを考えると、今後、一層の伸びが予想される結果と考える。



【「ねえ。きいて。」を使った取組】

とりわけ高度な使用例として、自分の体調を伝えることができるようになった点がある。例えば、生理前や生理中に起こる腹痛等は、現在は「おなかが痛い」というアイコンを選択し、伝えている。当初はこういったケースでは「ちょちょやって」というアイコンを選択することが多かったが、その都度「おなかが痛い」のアイコンを選択するよう指導した結果、正しいものが選択できるようになった。

また、本生は、耳に違和感があると小さなパーツ等を詰め込む「癖」を持っているが、耳に違和感を覚えた際にも「みみが痛い」のアイコンを選択できるようになった。このような使い方が身につけてきた結果、大事に至る前に病院に行って処置してもらえるケースが増えており、本生の体調管理という観点から、そして保護者の大きな心配事の克服という面からも、大きな成果が得られたといえる。

アプリ「ねえ。きいて。」では、ほかにも、コンビニに行きたいときに親に対して自主的に使用することもできており、本生が保護者と気持ちを伝え合う上で最も重要なツールと位置付けることができる。

・その他エピソード(画像などを含めて)



(授業中も笑顔で「分かって動ける」学習が成立)



(初めての「セリフ」…オペレッタの練習風景から)

発声が行えるようになった結果、本年度は本校恒例の「オペレッタ」でも肉声で参加できるようになった。これまでは録音での参加であったが、本年度は 700 人の観客の前で堂々と自分の声を披露することができた。その姿に、保護者と家族は涙を流して喜んでいて、発語と発声が、本生のみならず周囲にとっても良い影響をもたらしている。まさに今、iPad のおかげですべてのことが好循環にあると言える。

今後は、「要求の精度を上げる」「文字の入力を定着させる」といった従来の取り組みの応用に加え、発語や発声の訓練等にも積極的に取り組もうと考えている。発語や発声ができるようになったことで、iPad というツールなしでも意思を伝えられる可能性が見えてきた。これまではジェスチャや表情に加えて iPad で文字を入力し、要求を伝えることを保護者と支援者で重点的に進めてきた。言葉でも伝えることができれば、さらなるコミュニケーションの段階が開かれると感じる。究極の目標は iPad などの支援機器を自在に扱いながら円滑なコミュニケーションを行えることである。そのような可能性を実感させてくれた一年間であった。